

「武蔵野中南部の地誌」考察上の主眼点

橋本素子

一体、ある地域の地誌を研究考察することは、その地域の自然地理的条件
或は人文地理的条件、または歴史的考察をも必要とし、総合的、多角的検討
を要求するものであり、地理学を多少とも学んだ者にとって興味ある問題で
ある。

さてその研究地域選定に当つては

- (1) 自宅から比較的近距离に位置し、日帰り調査が可能であること
- (2) 何らかの興味ある問題を含んでいること
- (3) 都市的性格を帯びていること

などを考慮して、武蔵野の中間部、小金井市と府中市を中心とする地域に
定めたのである。

本地域の特殊性として次の二点が挙げられると思う。全体に武蔵野は乏水
性台地の為、南方多摩川沿岸の沖積地などにおける自然発生の集落を除いて、
近世に至つてようやく開発の進んだ地域が多く、いわゆる新田集落の立地を
みたのである。このように、武蔵野は計画的な新田集落の典型的な発達地域で
あり、本地域の地理学的考察に当つてはこの集落地理的考察が一つのポイン
トとなる。

次に、当地域はその地理的位置により大東京とのつながり深く、常に都
心部と発展と共にし、農作物の供給地として、又は都心よりあふれでた人口
の受け入れ地として、或は都心部では建設の余地のない工場、学校、遊興場
墓地などかなりの面積を必要とするものの建設地などを呈出する場として、
都心の補助的、附屬的機能を持つ都市として発展し、いわゆる衛星都市とし
ての性格を呈しているのである。

このような傾向は当地域のみならず東部の都心に隣接している地域は勿論
のこと、附近の武蔵境、田無、国分寺、国立など至る所でみられる現象であ
らう。

ともあれ以上の二点に主眼をおき、地形、地質等の自然環境はこれ等の考
察の土台とし、人口、産業、交通その他の人文地理的研究にも常に上述の二
点を念頭におき、それとの関連を究明するべく進めていった。

そもそも、小金井市、府中市は武蔵野のほぼ中央南部に位置し、都心より
西方へそれぞれ国電中央線、京王多摩川線により二、三十分の距離にある二

れ等の線に沿つて発展した大東京の市街もこの辺までくるとその連続性を失い、駅附近にその市街地が限られるようになり、まだ多分にひなびた景観を呈し武蔵野の古い面影を至る所に残している。しかしこの地域も最近大東京の発展と共に急速に発達し、都心と密接なつながりを持ちながら、その衛星都市的役割にも徐々に変化を来しているようである。

一般に、武蔵野は大正十二年の関東大震災を一つの契機として急激な変貌を遂げたといわれており、当地域も都会への流出を主とした野菜栽培地から都人の住宅地と化し、更に第二次世界大戦を一つの契機として、戦災による都市の外延への人口移動は著しくなり、市街地への転化、工場地帯の発展などがみられ、更に最近の東京の都心への人口集中がその近傍の諸地域にも及び、ごくごく新しい市が誕生することとなり、小金井、府中の両市も御多聞にもれず各々昭和三十三年、昭和二十九年に市制が施行され、大東京の後背地として重要な役割を演ずる、いわゆる衛星都市としての機能を全うすることとなったのである。

以上の如き衛星都市化の問題、或は集落の発展を主眼とした考察は、当研究地域の過去の史的発達過程を知ると共に、将来の方向を示すものとして一応本地域の地理学的な基本的特質を把握したものと想うのである。

曾根丘陵地域の地形と土地利用

濱田文子

山梨県甲府市の南方約10 Km、御坂断層崖の前面に発達する曾根丘陵は巾3 Km、長さ10 Kmの地域であり、甲府盆地床と背後の御坂山地との間の中間的な位置を占めている。丘陵の構造物質については、古扇状地堆積物説、氷河堆積物説等のとられた時期もあつたが現在では火山泥流説が有力となつていゝる。即ち、甲府盆地北方の火山——ハツ岳、茅ヶ岳等——を源とする火山泥流層（輝石安山岩礫が凝り、砂、火山灰によつて凝結され凝灰岩状になつたもの）が30～50 m程度の発達をみせており、これが曾根丘陵の主体をなしているのである。尚、火山泥流層の上部には浮石とロームの堆積が見られるが、土壌侵蝕が激しい為、これらが全面に残存しているとはいへない。又、火山泥流層の下部には古甲府湖の湖成堆積物層の発達がみられる。

丘陵部は開折が激しく、御坂山地に源をもち前面を流れる笛吹川に流れこむ小河川によつて6小丘陵に分けられる。これらの小丘陵は何れもその前面を約60 m前後の崖をもつて盆地床に接しており、又その表面は大略山地に